

《特別連載》

家族面接の実践から里親家族支援を考える

その4 ジェノグラムから里親家庭を考える

早樫 一男

大谷 多加志

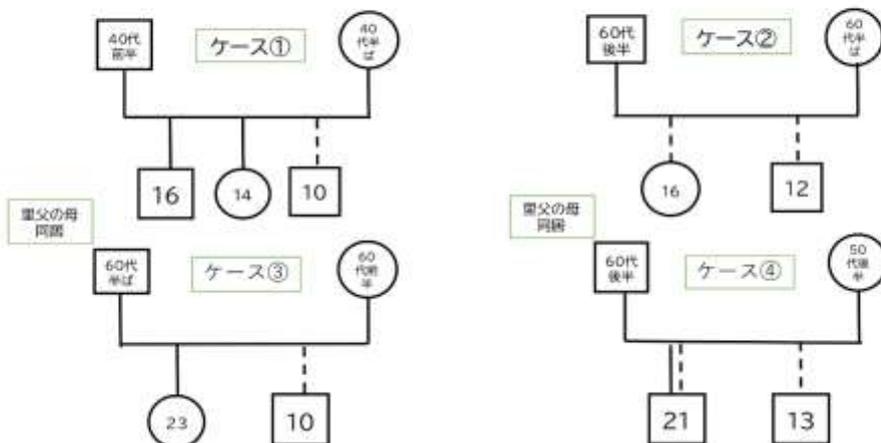
坂口 伊都

千葉 晃央

《はじめに》

3回続いた連載ですが、前回はお休みをいただきましたので、今回は4回目になります。特別連載《その1》は「ジェノグラム フリートーク」として、ある家族のジェノグラムから意見交換をしました。フリートークには、上記のメンバー以外も参加しています。《その2》は里親家庭の「理解と支援」に思いを巡らせた座談会、《その3》は里親経験者が語る物語でした。今回は、「ジェノグラムから考える」として、4ケースを提示し、意見交換しました。関心がある方は、ともに考えてください。

《4ケースのジェノグラム》



《それぞれの家族》

早樫 里子(二重に囲んだ線)として委託された時点での年齢を記入しています。点線は里子/里親の関係で、実線は実親と実子の関係です。ケース2は男子が里親委託になった際、既に預けられていた里子がいました。ケース4は里親委託後に養子縁組となっています。ちなみに、里親に預けられた年齢は前思春期の10歳~13歳で、いずれも男子という点が共通しています。4ケースを見てどのようなことを思いましたか？

大谷 まず、家族にそれぞれの色があり、バラエティーがあるという感想です。ケースごとに見てみると、ケース1はどのようなタイミングで里子を迎えることになったのかについて関心を持ちました。実子の二人も思春期を迎え、親子関係も人間関係も敏感な時期に、さらにもうすぐ思春期に入るお子さんを迎える。これから先、読めないことが出てくると思うので、どういうタイミングで判断にいたったのかと思った。

ケース2は60代後半の里親宅に孫に近い年齢の男子が迎えられている。里親さんにすれば、面倒を見ようという思いはあるのだろうが、一方で、孫を預かっているという感覚になるのかなあと思った。里親と里子との心理的な距離感があって、親近感は生まれにくいのかなあと感じた。里子はあまり知らない親戚のおじさんおばさんに預けられたという感じではないか。

ケース3と4はこども世代という点からはそれぞれ上の方との年齢が離れている。また、実子であったり、養子縁組しているといった親子関係の中で里子として入っている。子ども同士の関係性でも不均衡が生じて不思議ではないと思った。ケース3の場合、23歳の女性が仕事をしていたら、同じ子ども世代といっても、実際には、大人世代という受けとめだろう。60代の里親夫婦のところに若い社会人がいて、その中に里子として迎えられている風景が思い浮かびにくかった。家族の中に溶け込むことがイメージしにくかった。

早樫 里親の年齢と里子の年齢差から生じる世代間ギャップ、きょうだい関係(同胞システム)などの観点からの感想ですね。

《里親宅での居場所とコミュニケーション:思春期に差し掛かる子どもたち》

早樫 この年齢で里親宅にいく子どもたちは自分のポジションとか居場所について、どんなふうに思いながら入っていくのだろう。例えば、ケース1は年齢の近いメンバーがいるので、それなりの安心感があるかなあと思った。ケース3や4は子ども同士と言えども年齢がまったく離れている。

千葉 私やったら、自分の部屋に鍵をつけてほしいと思う。自分の部屋には鍵があるのかということをもまずは聞きそう。パーソナルスペースが確保されているのか、どれぐらい干渉されないのかということが気になる。

早樫 思春期に入る前の男の子が里親さんと、どの程度会話をするのだろう？子どもの側には、言語的なコミュニケーションをとる力があるのかどうかといった点や思春期に入る前の男の子の課題とか特性とかいうことも考えて委託するということは大切やね。

千葉 男の子は、だんだん会話をしなくなると思う。

坂口 話してくれる子はつながりやすいけれど、話しができない子は困ってしまう。

大谷 思春期のアイデンティティの課題に向き合う時期に、新しい家庭に入って暮らし始めることになる。その状況の中でやりくりすることに精一杯で、自分が何を感じていて、どこに不安があるということをも自分でも分かり切れないのではないか。4ケースとも、子ども達は自分の境遇について、自分でもしっかりとらえきれないような気がする。

坂口 里子が小さければ、「おいで、おいで」という感じで言語以外の関わりも可能になり親近感が生まれる。また、高校生ぐらいになり、年齢も大きければ、大人になっていく上でのサポートを目指せ、「困ったことがあったら言ってね」というように、一定の距離感でお付き合いできる。中学生ぐらいの年齢って、一番中途半端な年齢ではないか。本人もどうしたら良いか分からないという感じが強いと思う。

早樫 高校生になると、自分の進路の方向とか自分の目標があるだろう。高校卒業後のことも考えながら、里親宅で生活をするといった、自分なりの意味づけがある。里親宅で文句があってもそれなりに割り切るだろう。中学生って、それも難しいだろう。この年齢の子ども達の委託って難しい。

坂口 里子を受ける側も里子として受け入れてもらう側も立ち位置や距離感を測るのが難しい。

《里親と里子 世代間ギャップ》

千葉 10歳ぐらいになると、身体が変化してくる時期であり、なおかつ自我意識が芽生えてくる。普通の子育てでも難しい。里親と里子の年齢差から見ると、祖父母に近い年齢の里親が、力のマネージメントをうまくできるかどうか心配になった。ケース2と3は女の子を育てた後の男の子やから、ご飯の量、一つをとってもそのギャップがあるのではないかと思った。また、外での時間の使い方、例えば、夜遊びとか、夜の時間の使い方といったヤンチャ具合など、日常的な些細なことから衝突することが出てくるだろう。

早樫 力のマネージメントというのをもう少し説明してください。

千葉 小学2～3年生ぐらいなら、家族で外出する際に「おいで…」と言って、親も引っ張ってお出かけということもできるだろう。子どもはいいやいや行かされたけれど、結果的には、楽しかったということもあるだろう。それ以上の年齢になると、「行きたくなかったのに無理やり連れていかれた」「車の中が熱いだけで渋滞していてうざかったわ」等、はっきりくつきり感じる。親のリードに抵抗を感じるというのが、実子の場合でも起こる。

早樫 60歳代後半で思春期の子どもを預かると想定したら、どんな感じですか？気になることや難しく思うこと、逆に、楽しく思うことなど、どんなことを想像しますか？

坂口 やっぱ、どの程度、家族の中に入って来るのか、来ないのかといった点が気になる。性別にもよるが、どれぐらい、外の世界に惹かれているのかということも影響してくる。大きくなってから家庭に来ているから、どのように心配したら良いのかについて、戸惑うと

いう感じ。10歳ぐらいで家庭に来たら、周りの父母のエネルギーの中で、しんどく思うかもしれない。また、子ども達のタイプによるが、なかなか言葉にできないとか、うまく表現できない子については、「どのように相手したら良いか」と悩むだろう。幼い子どもの場合は、言葉ではないコミュニケーションで関係作りができるけれど、大きくなるとそこは難しくなる。一緒に出掛けようという年齢でもなくなってくる。逆に割り切って、「寮のおばちゃんぐらいに思っておくぐらいの形で預かります」というスタンスもありだと思ふ。

《家族システムへのまなざし：里父の役割》

千葉 ケース3と4の里父は実子に対する父親の役割、母に対する息子としての役割、また、夫婦としての妻への気遣いもあるだろう。さらに里父としての役割もある。さまざまな役割、マネー的な役割が多くあり、父はしんどくないかなと思った。三世代同居の中で、さまざまな三角関係もあり、家族・家庭としての複雑さもあるのではないかな。ケース2は核家族なのでシンプル。関係作りもやりやすい。ケース3や4は世代間境界も意識しないといけない。里父母は結構大変ではないかな。

早樫 里父の役割の課題でもあるし、里父母のカップルとしてのコミュニケーションの課題もあるということやね。上世代の介護の事と実子や里子への対応のことも含むよね。父親の機能について、家族システムといった面から、話がでている。家族に新たな一人が加わることにより家族力動の変化という視点はとても大切やね。

坂口 ケース3はなぜ里親をしようと思ったのだろう。里親自身が60代以降になったら、親世代の介護問題がでてくるだろう。

早樫 ケース3や4は親の介護の課題を背負っている場合が少ない。一方、子育ての経験はそれなりに積んでいる。子どもを育てた経験を社会貢献として里親として還元ということもあるだろう。ただし、自分たちの子育てのやり方とか形が大体決まってしまうのかなあとも思う。「我が家はこうやって育てた」という感じ。子どもが成人年齢を迎えたら、それなりに親の役割は終わったという部分と自分たちは自分たちの思いや心情で子育てをやってきたと思っているのではないかなと思う。里親の子育ての仕方や文化や価値観などが決まっている中に里子が入るとするのは、里子自身もいろんなエネルギーを使うことになる。里親家族や家庭にジョイニングするって、大変やなと思った。

《里親家庭と里子とのジョイニング》

大谷 思春期を迎える里子が新たな家庭に入っていくということは、そこが生活の場になる。ということで、里子はその家庭の文化やルールなどを意識しながら探っていく。一方、里親はわが子にしたようなことをしてあげたという気持ちになるだろう。同じようにしないと可哀そうな気がしたり、そうしてあげないと里子は自分だけしてもらっていないと思ったりするのではないかなといった心配を先回りして思ってしまうというようなことがあったりするのかなあとも思った。きょうだいの中で対応の差が起こらないようにというのは、

一般的に家庭の中では意識する。里父母の思いとしては自然なことかなあとも思った。一方で、その子の個性とか理解力に合わせた対応することをその子にとっては一番利益があることだね、という枠組みがあればと思う。これは、援助職的な観点かなとも思うので、できる人とできない人がいるだろう。里親さん、みんなに求めるのも違うだろう。

坂口 里親体験者としての元里父の思いを聞いたことがある。元里父は「実の息子や娘にしたことを里子にもしてあげなくてはと思っていた」と語っていました。「同じようにしてあげなくては」という思いや同じようにするのが愛情だという思いが元里父には強かったようです。今は「里子にとって、いろいろと連れて行ったりしたことは良かったのか？」と振り返っているとのことでした。

千葉 ケース3や4の場合、里親としてやることと実子に対して親としてやる役割は違う。それを同時並行にやらないといけないというのが、親に課せられているタスク。里子にしたら、「なんで自分はダメで、もう一人は良いの？」と思いになる。里親は役割を変えているつもりでも、里子には「何なんだこの家は？」という不満の思いが生じるだろう。自分はこの家に入れていないという気持ちを年の差がある里子は感じやすいのではないか。ケース2はまだ年齢が近い。話しかけもできるだろう。家庭の文化として、言い切りやすいのはケース2。ケース3や4は二つの文化というか、二つのルールが存在し混乱が生じるのではないか。

早樫 きょうだい関係、子どもサブシステムについてはどのように思いますか？

坂口 最初に思ったのは、ケース2には、同じような子どもがいるので、里子にとって、一番、居心地よさそうに思った。自分と同じような立場、境遇に人がいる。子どもサブシステムで考えると年齢も近い。ケース1と2の子ども同士の年齢は近いけれど、3と4は、子ども同士の年齢は離れている。一人っ子が二人という感じではないか？特に気になるのはケース4。

早樫 きょうだい関係というか子どもサブシステムについての視点や理解は大切ではないかと改めて思った。家族に里子が加わったということで、新たな子どもサブシステムの構築が求められる。新たな期待や楽しみとともにしんどさを感じるかもしれない。子どもサブシステムが新たな構築を求められることになるという面での関心を持っておくことや子ども世代への支援が必要になるかもしれない。

坂口 ケース1の場合、里子からすると子ども同士の年齢差が近いということは、安心材料になるのではないかと考えた。兄は弟ができたというような思いになったかもしれない。男兄弟のサブシステムができたという感じかな。兄の働きかけに対して、里子がうまく応えられるかどうかによって、このサブシステムの成立が左右されることになるだろう。姉は性別の違いもあるので、適度に距離を持った頼れるお姉ちゃんという感じではないか。

早樫 前思春期ぐらいからの里子を迎える里親家族/家庭について、家族という視点から自由に語っていただきました。ステップファミリーの課題とは異なる課題があり、家族理解の立場からの支援の必要性を感じた時間となりました。

《まとめに代えて…》

今回は、「中途養育」と言われる里親/里子家庭のジェノグラムを提示しました。思春期に向かう里子と里子を迎える里親家庭の双方が直面するであろうさまざまな課題について、ジェノグラムから検討しました。ただし、さまざまな課題のすべてを網羅できた訳ではありません。

ところで、現在、「次期都道府県社会的養育推進計画」の策定要領における論点整理等が子ども家庭庁から示されています。その中には、「里親等への委託の推進に向けた取組」の項目があり、「やむを得ず委託解除された数等を把握し、要因分析を踏まえて対応方針を検討」とされました。これまで、「やむをえず里親委託解除された数」が公になったことは極めてまれです。当然、「要因分析」などの取り組みも積極的にはなされていません。

特に、思春期の児童の里親委託である「中途養育」の場合、さまざまな困難があっても不思議ではありません。一般的には「里親不調」と言われていますが、「やむをえず里親委託解除」を防ぐための取り組み《要因分析》に、この特別連載が先駆けの役割につながればと願っています。